

紹介

覺 え 書

——青木正兒博士の畫——

都 留 春 雄

書齋の壁を飾っていたこの繪は、迷陽青木正兒博士の肉筆の作である。初代の所有者はIさんで、Iさんは、青木博士に私淑されていた方だと、人づてながら承わっていたので、博士が、畫かれ進呈されたものか、或いはIさんが博士にねだられたものか。それで所有されたのだと推察される。私はIさんを直接存じ上げた譯ではなく、亡くなられて後、人を介し御家族から譲られ、第二代の所有者になる幸運に恵まれた。

青木博士は、昭和二十二年六月を以て退官され、私ども

は、その翌年の四月入學で、博士の名物學を受講する機を逸したが、まだ新入氣分の抜けぬ頃から、博士に一度お目にかかりたい思いを抱き、同じ思いの黒川洋一君との兩名の望みを、當時大學院生で後に『青木正兒全集』の編集委員のひとりになられた高木正一さんが耳にされ、先生のお許しをとって下さり私ども兩名を連れて、下鴨出雲路橋のお宅に參上する手筈を調べて下さった。二階の書齋に導かれて眞先に目に入ったのは、君山狩野直喜博士の「移山書屋」と記された扁額と、それに向き合う壁上の、湖南内藤虎次郎博士の「守拙蓬廬」と大書された一幅であつた。ふたつの見事な筆蹟に目が眩み、茫然となった記憶がある。

青木博士のこの繪には「閉戸著書多歲月、種松皆作老龍鱗」という贊が記されている。これは盛唐の詩人王維の七律「春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇」と題する作の尾聯で、博士は、それを畫題に描かれたのである。因みにこの七律の私の岩波文庫『王維詩集』所載の訓みを引用させていただと、

春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇

(春日裴迪と新昌里を過ぎ、呂逸人を訪れて遇わず)

桃源四面絕風塵 桃源の四面 風塵を絶つ

柳市南頭訪隱淪 柳市の南頭 隱淪を訪う

到門不敢題凡鳥 門に到つて敢えて凡鳥を題せず

看竹何須問主人 竹を見て何ぞ主人を問うを須いん

城外青山如屋裏 城外の青山 屋裏の如し

東家流水入西鄰 東家の流水 西隣に入る

閉戶著書多歲月 戸を閉じ書を著し歲月多し

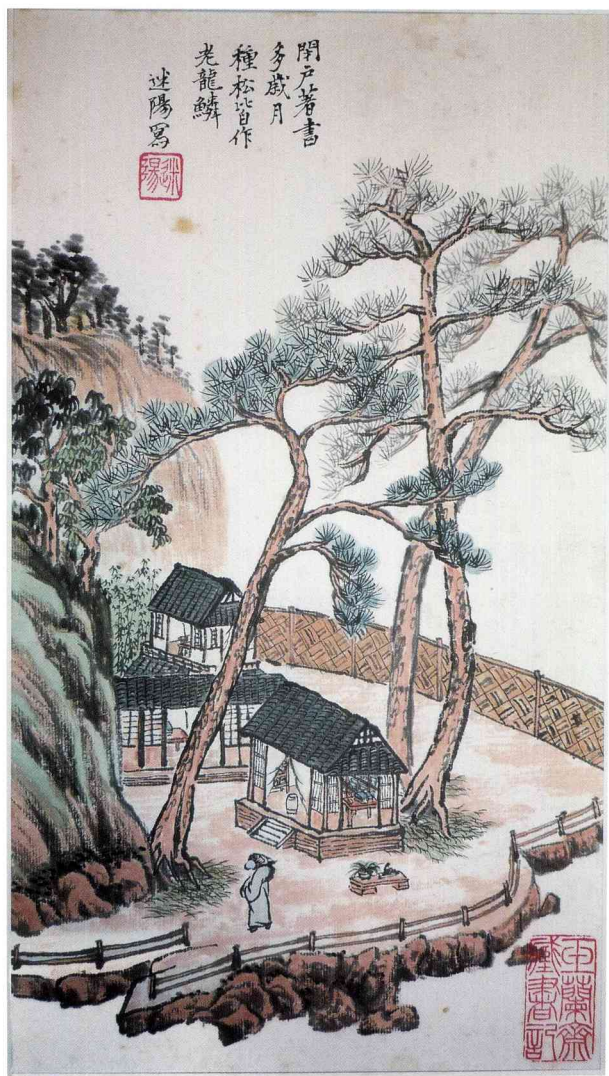
種松皆作老龍鱗 松を種えて皆な老龍鱗と作る

右の詩は、王維が心の友裴迪と呂逸人を訪ねたが生憎留守であったのを、それとなく諧謔の心を漂わせつつ詠じた作で、委しい詩意は『王維詩集』を御覧いただくとして、訪問相手の呂逸人の逸人とは、官途に就かぬ知識人を指し、その人柄と讀書人、學者としての生活振りおよびそれに相應しい住居を表現した詩である。青木博士のこの繪は、そ

れを主題とされているので、Iさんを呂逸人に暗に擬するところがあつたのかも知れない。

勝手な推測に過ぎないが、青木博士は中國の詩人の中では、どちらかと云えば杜甫より李白を好まれたと思う。『李白』(漢詩大系8・昭和四十年五月集英社刊)の著はそれを示していると思われ、また陶淵明もお好きな詩人であつたと思う。書齋に名付けられた内藤博士の「守拙蓬廬」の一幅はその證左であろう。そして今ひとつ王維も白居易や陸游とともに博士の好みに合つていたのではないかと想像される。この繪は、それを示唆するように思われるのである。

(平成二十二年三月二十日)



青木正兒作

王維詩意圖

閉戶著書多歲月
種松皆作老龍鱗

閉戶著書
多歲月
種松皆作
老龍鱗
迷陽寫



都留春雄寄贈
京都大學文學研究科
中國文學部研究室藏
(本文一二四頁參照)